音　　韻（理論・現代）

中井　幸比古

1. はじめに

日本語の音声・音韻に関する研究は，人文系に加えて理工系・医学系・学際的研究が増加の一途をたどっており，その重要性もますます増して来ている。しかし本稿では私の守備範囲・文献量の多さの両方の理由から，ほぼ人文系の研究に限らざるを得ない。文献の見落としも多かろうし，取捨選択の偏りも大きかろう。誤解もあろう。予めお許しを乞う。

学界・単行本・研究論文に分け，さらに研究論文は分野別に見ていく。共著の場合第一著者のみを掲げる。副題を省くことがある。本文中，アクセントはア，イントネーションはイントと略す。今期の刊行でも前期展望で触れられたものは省く。2000年1—3月の刊行で，今期の研究に関わるものは含めることがある。

2. 学界・研究会等

前期展望号の「音韻（理論・現代）」では「国語学界では変異・運用に関わる研究はある程度行われているものの，体系・構造に関わる研究はほとんど目につかない」とされたが，今期は本誌『国語学』において後者に関するオーソドックスな研究がいくつか見られた。一定数の研究者によって着実に研究が進められている。しかし，現代日本語を中心とした音声・音韻の研究が「いわゆる国語学界の周辺，あるいは外側で盛ん」という状態は，やはり変わっていない。

特に日本音声学会の活動は前期に引き続き活発で，機関誌『音声研究』は，幅広い分野にわたる特集を毎号組んだ：「音節とモーラの理論」(2-1,1998.4)，「音声研究の新しい手法」(2-2,1998.8)，「アフリカ諸語の音声」(2-3,1998.12)，「音声研究と他領域のインターフェース」(3-1,1999.4)，「日英対照音声学」(3-2,1999.8)，「中間言語の音声」(3-3,1999.12)。音声学セミナーも続行。新たに日本音韻論学会『音韻研究』1・2（開拓社，1998.4・1999.3）が出た。同学会は「英語音韻論研究会」からの発展で英語学系研究者が主に参加しているが，同誌には日本語音韻対象の論文もかなり掲載される。いずれも口頭発表のレジュメに基づくもので，本稿では個々の論文の紹介は省く。杉藤美代子を中心とする音声文法研究会は前期に引き続き活発に活動し，理工系も含む多方面の分野の研究者を

動員して，同研究会編『文法と音声II』(くろしお出版，1999.6) を出した。同書はさらに続刊の予定。

3. 単行本を中心に

音声・音韻の概説書の出版は盛んであった。田窪行則他『岩波講座　言語の科学2　音声』(岩波書店，1998.5) は工学系の情報も含む幅広い内容。『音声研究』3-3 掲載の書評参照。窪薗晴夫による概説が3冊出た：『現代言語学入門2　日本語の音声』(岩波書店，1999.4)，『音声学・音韻論　日英語対照による英語学演習シリーズ1』(くろしお出版，1998.3)，同・太田聡『音韻構造とア』(研究社，1998.2)。いずれも独自の観点から興味深い言語現象を例にあげ，最近の音韻理論を紹介する。割り切った形で書かれているが一層詳しい議論も伺いたい。音韻理論と言えば，喧しい最適性理論の概説が出た：René Kager *Optimality Theory* (Cambridge University Press, 1999)。同理論を利用した日本語の音声・音韻研究も多くなってきているが，それによって言語現象の解明が進むことは，喜ばしい。英文の音声学教科書として親しまれてきたラディフォギッドの著書の翻訳がなされた：『音声学概説』(竹林滋他訳。大修館書店，1999.11)。より入門的な書物に，城生佰太郎『日本語音声科学』(バンダイ・ミュージックエンタテインメント，1998.2)，松崎寛他『よくわかる音声』(アルク，1998.12)，窪薗晴夫他『日本語の発音教室』(くろしお出版，1999.10) 等があった。後2者はCD付きで独習に便利。

日本語音声・音韻だけの単行本ではないが，Natsuko Tsujimura (ed.) *The Handbook of Japanese Linguistics* (Blackwell, 1999) が原口庄輔・窪薗晴夫・Junko Itô & Armin Mester・日比谷潤子による日本語音韻論概説を含む。島岡丘他編『英語学文献解題第6巻　音声学・音韻論』(研究社，1999.10) は，文献解題を通して，英語圏における音声学・音韻理論の概略を知るのに便利。日本語を対象とした若干の文献の解題もある。S. Kaji (ed.) *Cross-Linguistic Studies of Tonal Phenomena, Tonogenesis, Typology, and Related Topics* (東京外大AA研，1999.3) に含まれる，早田輝洋 "Accent and Tone: Towards a General Theory of Prosody" (下掲著作集第1章の梗概的内容)，上野善道 "Classification of Japanese Accent Systems" (日本語ア体系の類型の共時的分類) は，国内の音調研究の一端を海外向けに示す。井上史雄 "Sociolinguistics of Intonation Change in Progress in Tokyo" (『東京外大論集』56, 1998.3) は尻上がり・擬似疑問イントの概説。研究の国際化は徐々に進みつつある。

『NHK日本語発音ア辞典』が13年ぶりに改訂された (NHK放送文化研究所，1998.4)。新アの採用・語彙の差し替えに加えて，利用の便を考えて色々の新工夫が見られる。しかし，アの予備知識のない人が解説を読むだけでこの辞典を使いこなすのはまだ難しかろう。付録の「全日本の発音とア」には，全国の現在の若い世代の発音・アに関する情報が盛られたが，個人差が激しく流動的で記述が難しい。情報も足りない (4.2.2節も参

照）。次の改訂ではどう扱われるのだろうか。辞典作成と並行して『アナウンサーア調査報告　平成8･9年』（NHK放送文化研究所放送研究部編刊，1998.7）等の実態調査報告もあった。『日本語の語彙特性3　単語ア（1）（2）』（三省堂，1999.12）は，『新明解国語辞典第四版』のすべての語とそのアを収録し，さらに，若年層の10名の話者について，各語のアの「妥当性」と各語の「既知度（馴染み度）」を示す。付属CD-ROMには，テキストファイル形式で多様な情報が収録してあり，利用価値が非常に大きい。

アの類別語彙について，文献資料を中心とした労作があった：秋永一枝他編『日本語ア史総合資料　研究篇』（東京堂出版，1998.2），坂本清恵他編『楳垣京都ア基本語資料・「早稲田語類」「金田一語類」対照資料』（FD付き。ア史資料研究会，1998.10）。多方面に利用できるが現代語アの調査研究にも必需品。『国語学』199（1999.12）に書評あり。秋永一枝『東京弁アの変容』（笠間書院，1999.3）は，著者の東京ア関係のこれまでの論文をまとめたもの。ア史資料研究会とそのメンバーの活躍は次期にも続く。

個人の著作集として，さらに次のような物があった。杉藤美代子の著作集『日本語音声の研究』が，『5「花」と「鼻」』（和泉書院，1998.3），『6　柴田さんと今田さん』（同，1998.10），『7　教育への提言』（同，1999.5）を出して完結した。長年にわたる旺盛な研究活動に圧倒される。早田輝洋『音調のタイポロジー』（大修館書店，1999.2）は，音調に関する既発表論文の選集。日本語・朝鮮語を扱ったものが中心であるが，個々の言語・方言の記述にとどまらず，東アジアの諸言語の音調の地理的分布・史的発展の中で，個々の言語の音調の位置付けを行う。『言語研究』117（2000.3）に上野善道による書評掲載。

山口幸洋『日本語方言一型アの研究』（ひつじ書房，1998.12）は，日本各地の一型アの音調について，長年にわたって自然談話から帰納してきた結果を一堂に集める。各種研究の基盤として長く利用されよう。一型アの日本語史における位置付けについての仮説も提示されるが，より詳細を知りたい――例えば，既に指摘されている問題点として，個々の語が特定の「類」に所属するようになった理由は何なのか――。著者には本書の他「福井一型ア研究のために」（『名古屋･方言研究会会報』15,1888.5），「福井一型ア百人調査（1）」（同16,1999.5）等の報告もあった。福井の一型ア分布域は従来の報告より広そうだという。次期の木部暢子『西南部九州二型アの研究』（勉誠出版，2000.2）は，今期の「ゴンザの助詞のア資料」（『国語国文薩摩路』41,1998.3）・「屋久島ア再考」（『国語国文』68-11,1999.11）等を含む従来の著作に書き下ろしを加えたもの。前期から評判の高い一連のゴンザア研究や西南部九州各地のア・音韻中心の記述調査研究と，西南部九州二型アの比較方言学的研究を含む。後者は，2拍体言の音調と類の統合に基づく系譜論がア体系全体や「式」等の点からは問題を有することを指摘し，早田輝洋説をヒントに，当該地域の二型アは名義抄式アの「高起式・低起式」といった「式」がそのまま保たれて成立したものだとする。

4. 研究論文を中心に

4.1 音節・モーラ・リズム

音節・モーラ・リズムの研究は今期もかなりあった。『音声研究』2-1 (1998.4) が「音節とモーラの理論」の特集。窪薗晴夫「モーラと音節の普遍性」(同) は，モーラと音節は相互排除的関係にあるものではなく，英語のような音節を基調とする言語でもモーラという単位が不可欠であり，両者は同一言語体系内で共存しうると説く。鮎澤孝子他「TEMAX による日本語リズム研究と言語教育への応用」(同) も，各言語がモーラ拍・音節拍・強勢拍のどのリズムをとるかは画然と分かち難いことを前提に，諸言語のリズムを総括的にとらえようとする "TEMAX" なる分析法を紹介し，教育への応用を探る。他方，河野守夫「モーラ，音節，リズムの心理言語学的考察」(同) は，実験的研究からモーラ拍リズムの独自性を主張し，モーラ拍リズムは強勢拍リズムとは生得的な "neural clocks" のリズム型が根本的に異なるという。木田章義「音節とモーラ」(同) は，『国語学』178 所収論文の補足と，同所収の諸氏論文への反論。用語の定義等を確認した上で，中央の日本語は上代以来一貫して等時的リズム単位としてのモーラを有したと再説する。

助川泰彦他「日本語長母音の短母音化現象をめぐる諸要因の実験音声学的研究と音声教育への示唆」(『言語学と日本語教育』くろしお出版，1999.1) は，当該現象が特に非語頭位置で甚しいことを実証する。田中真一「日本語の音節と 4 拍のテンプレート――川柳とプロ野球声援における『字余り』の分析――」(『文法と音声 II』くろしお出版，1999.6) は，音節やフットに加え「4 拍の単位」の重要性を指摘する。荒井雅子他「英語の音節型と促音知覚」(『音声研究』2-3,1998.12) は，短母音と無声閉鎖音の連続を持つ英語風音連鎖について，母音・子音の持続時間と促音知覚の関係を探った実験報告。外来語の促音生起と関係があるのか。

その他，認知科学における「力学系理論」なるものを紹介した北原真冬「発話産出と知覚におけるリズムの研究」(『同』3-1,1999.4) や，内田照久「日本語特殊拍の心理的な認知過程からとらえた音節と拍」(『同』2-3,1998.12)，ニック・キャンベル「音節構造から見た日本語の発話タイミングについて」(『同』3-2,1999.8) もあった。

4.2 語アクセント

4.2.1 共通語アを扱ったものに，次のような研究がある。

前期以前からの窪薗晴夫による一連の複合語アの研究が 1 冊にまとまった：『複合語の音韻構造に関する対照言語学的研究』(科研報告書，2000.3)。今期の「金太郎と桃太郎のア構造」(『神戸言語学論叢』1,1998.3) 等を含む。前期の窪薗論文への反論として，上野善道「複合名詞後部要素のア型保存」(『言語と文化の諸相』，1999.3) が，複合名詞のアが 1 単位に収まるかどうかは，後部要素が複合語であるか否かによることを述べる。田中真一「フット内における母音のきこえと複合語のア」(『音声研究』2-1,1998.4) は，後部要素

4拍の複合語における，後部要素の音節構造・母音の広狭（きこえ）・フット形成とアの関係について論じたもの。定延利之「アを合成するとは何をどうする行動か」（『文法と音声II』くろしお出版，1999.6）は「話し手の行動」の観点から漢語複合語アを扱う。

胡世光「漢語ア規則の再編成――『モーラ』から『字』へ――」（『東大言語学論集』17,1998.9）は，拍ではなく「字」を単位として漢語アを調べ「漢語アは＠型と－2字型にまとめられる」としたもの。「字」はどのような音韻論的意味を持つのか。服部範子「日英語超分節音変化のメカニズム：単語アの変異分析」（『音声研究』3-2,1999.8）は，－3型と平板型への変化・諸活用形のアを一貫させようとする変化を『NHKア辞典』の諸版を対照することによって再確認し，英語のア変化との類似点を指摘する。一方，秋山英治「現代語における外来語アの諸相」（『愛媛国文研究』49,1999.12）は『NHKア辞典』の諸版における外来語アの異同を調べ，改訂が進行中のア変化にそれほど忠実に行われているわけでもないことを指摘する。田野村忠温「外来語アにおける原語の発音の関与について」（『日本語科学』5,1999.4）は，電子辞書から抽出した大量資料により，外来語アが原語のア・分節音と関係することを実証する。共通語ア・方言アとも資料の電子化が進みつつあるが，著作権等との兼合で，誰でも自由に検索・加工ができる形での公開がまだ少ない。また，この種の資料を用いた研究は，（上記はそうではないが）既知或は予測される法則性の確認に留まることがある。

その他，アと母音の無声化の関係の実験音声学的研究として北原真冬“The Interaction of Pitch Accent and Vowel Devoicing in Tokyo Japanese”（*Japanese/Korean Linguistics* 8,1998）等があったが，やはり現象が複雑で，秋永一枝が上掲書で指摘する顕著な世代差も加わり難しい。屋名池誠「数詞のア」（『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院，1998.2），田中宣広「付属語アの研究に関わる諸課題とその解決法」（『ことばと文学と書』双文社，1999.8）もあった。

史的研究に属するが，川上蓁「日本伝統音調表記の静と動」（『国語学』197,1999.6）は，一見静（段階）的に見える声点・節博士等の表記が，時代が下るにつれて，より動（方向）的に用いられるようになるという。

4.2.2　方言アを扱った研究を見る。

方言ア研究は，地域的偏りがあるが今期も盛んであった。伝統方言のアは，分節音・語彙・文法等に比べて健在で，調査が行き届いていない地点も多い。各地の方言アを扱うことによって，東京や近畿中心部のアのみを対象としていたら捉えられなかったであろう，新たな法則性や問題点が浮かび上がることがある。

柳田征司「京阪式・東京式中間ア――金沢市方言のア――」（『愛媛国文と教育』31,1998.7）は，著者の「音便の定着と特殊音素イ・ン・ッの独立度の違いによって，ア体系が京阪式・東京式・都城式の3つに分離した」という説を金沢アについて検証したもの。著者も認めるように上の仮説では説明できない現象があり，他の要因も併せて考慮する必要があるか。

杉藤美代子が先に刊行した『大阪・東京ア音声辞典』を資料に用いた，大阪アに関する研究が出始めた：金水敏の特殊拍アの世代差，前田広幸の漢語アをめぐる2つの研究[4.5節参照]，村中淑子・藤原多賀子の複合名詞アの研究（これらの文献名は『国語学』199の金水敏による同辞典書評参照）。次期の前田広幸「後部に2拍和語をもつ複合名詞ア再考」（『現代言語学の射程』英宝社，2000.2）は上記村中論文への反論を含む。中井幸比古『大阪アの史的変遷』（科研報告書，2000.3）は同辞典のアの中央式諸アにおける位置付けに言及する。ア辞典といえば，同『香川県方言ア小辞典』（同，1998.3），同他『徳島市同』（同，1999.3）が出た。断片的記述と史的変遷の考察も含む。同「中央式諸方言における複合名詞のア」（『神戸外大論叢』49-3,1998.9）もあった。これらや3節で取り上げたア史資料研究会関係の研究を通じて，中央式諸アの，変種・変遷の過程が一層明らかになってきた。同「香川県東部島嶼のア」（『国語研究』61,1998.3）は，真鍋式が従来の報告より東にも分布すると報じる。

四国西・南部アの，記述と変遷過程の解明が，前期に引き続き進んだ。清水誠治「音調型から見た八幡浜周辺アの成立について」（『国語学』197,1999.6）は，当該地区の多彩な音調型から，祖形として下降式と低接上昇式の対立を有する中央式を推定する。同「高知県香美郡物部村影地区のアについて」（『都大論究』35,1998.5）は垂井式の報告と変遷の考察。同「野忽那島のアについて」（同36,1999.5）は松山市近辺の中央式の報告で，式音調がやや独特であることを述べる。同他「愛媛県青島方言のア」（『日本語科学』6,1999.10）は，近世，現兵庫県赤穂市坂越（さこし）からの移民による島のアを中央式からの自律的変化と解釈したもの。坂越アは現在「ほぼ垂井式」だが，比較的最近まで中央式だったと推定して興味深い。

琉球アの調査研究が盛んになってきた。上野善道「与論島東区方言の多型ア」（『国語学』199,1999.12）は，当該アが昇り核によって弁別される多型ア体系であることを報じ，琉球方言にはN型アが多いが多型アも存在し，かつ多型アが琉球アの祖形であることを示唆する。著者には琉球アについてさらに以下のような報告がある：「徳之島松原方言のア調査報告——用言の部（活用形その1）」（『琉球の方言』22,1998.3），「同（活用形その2）」（『東大言語学論集』17,1998.9），「与論島東区方言の用言のア」（『同』18,1999.9），「沖永良部島諸方言の体言のア資料」（『アジア・アフリカ文法研究』27,1999.3）・「同活用形のア資料」（『琉球の方言』23,1999.3）等。「鹿児島県黒島大里方言の用言のア」（『言語と人間』2,1998.10）・「同方言用言の語構成と音調型」（『同』3,1999.10）は，複合動詞の前部要素が3拍か否かによって音調型が決定されるという他方言にない特徴を報告する。N型アは多型アより単純な音調型・体系を持つと思われがちだが，琉球アの実態はなかなか複雑のようである。このような各地点の詳細な調査が進行中である一方，琉球ア全体の類別語彙に関する，松森晶子「琉球アの歴史的形成過程——類別語彙2拍語の特異な合流の仕方を手掛かりに——」（『言語研究』114,1998.12）があった。服部四郎説を支持し，「琉球祖語において，2拍名詞の3・

4・5類が「板」類（無標）と「息」類（有標。第1音節が過去のある時代に長母音）にすでに分裂しており，2拍名詞の類の統合のありかたは1・2/3・4・5/3・4・5であった」と説く。

近代語と現代語研究の境目に位置するものとして，古録音資料によってア・音韻を解明する研究がある。金沢裕之他『初期落語SPレコードの大阪ア』（科研報告書，1998.9）や，1965年頃の録音を扱う中井幸比古『方言会話資料（1）　京都（1）』（同，1999.3）等があった。談話の文字化資料にタグ付けを行い，語ア・語彙・文法資料とする試み。古録音資料の発見・新公開も相次ぎ賑かだった：1900年パリでの川上音二郎一座の録音（清水康行「最も早い日本語録音資料群の出現」『国語学』193,1998.6，井上史雄「近代の言語変化」『日本語学』17-7，1998.6）等。次期の『古今東西噺家紳士録』（丸善，2000.1）も資料として貴重。『全国方言資料』のCD-ROM版（日本放送出版協会，1999.4）が出て，利用がいっそうしやすくなった。

方言アの共通語化についてはかなり蓄積があるが，情報量の地域差が大きい。少数語彙調査に留まりがちなのも問題。伝統方言アと異なり地域差だけでは括れないから，全国を網羅するのは不可能だが，ア体系を踏まえた上で，手薄な地域の調査を補う必要がある。また，この種の報告は未公開のまま埋もれているものも多いが，一定以上の価値があり，そのプライオリティーを主張するためには，手を入れずに公刊する必要がある。今期加わった報告を例示する。山田達也他「名古屋地方における大学生のア」（『名古屋・方言研究会会報』16,1999.5），鏡味明克他「三重県アの年層変化」（同15,1888.5）。重点領域研究大阪市調査を出発点とする田原広史他『東大阪市における方言の世代差の実態に関する調査研究』（大阪樟蔭女子大，1999.3）所収の報告は，重点大阪調査が多くを依拠した所の，金田一春彦・楳垣実の研究を引かない。古堀香他『JR神戸線沿線（大阪―姫路間）アグロットグラム』（甲南大方言研究会，1998.3），都染直也「加古川市西神吉方言のア（1）（2）」（『甲南大紀要文学編』107・111,1998.3・1999.3），秋山英治「アの共通語化にみられる特殊性――松山方言の場合――」（愛媛大学『人文学論叢』1,1999.12）や九州で古瀬順一「名詞アの型，30年の変容――島原半島方言の場合――」（『ことばと文学と書』双文社，1999.8）もあった。一型ア地域出身者による共通語アの知覚を扱ったOtake, T. et al. “Perception of Suprasegmental Structure in a Non-native Dialect”（*Journal of Phonetics* 27-3,1999.7）や平板化を扱う田原広史他「近畿中央部における専門家アの実態（その1）」（『日本語研究センター報告』5,1998.1）も一種の共通語化の報告。新方言的現象として，藤原多賀子「複合語の音韻構造」（神戸大学『国文学研究ノート』34,1999.11）と次期の吉本紘子「関西における省略語の新形式アについて」（『大阪アの史的変遷』［上掲］）が，相互に独立に，関西アの3・4拍省略語のL0 → L2への変化を報じる。

4.3 音声録音資料

方言の生の音声を収録したものに，大野眞男他『宮古大神方言の音声』(科研報告書，1998.2)，杉野ひろ他「徳島県那賀郡那賀川町島尻方言文末表現音声辞典」(『大阪樟蔭女子大日本語研究センター報告』7,1999.3)，中井幸比古『香川県東部島嶼のア資料』(香川県話し言葉研究会，1999.12) があった。以前重点領域研究「日本語音声」で収集された録音資料の一部がパソコンで聴けるようになった：杉藤美代子監修・著『日本列島ことばの探検』(富士通ビー・エス・シー，1998)。音質が良くないのが残念。別に田原広史によって同13主要都市調査のうち大阪市の一部が「(ファイルメーカー版)JCMD大阪」(科研報告CD-ROM，1998.3) として出ている。

山口幸洋が再々指摘する如く (上掲書)，言語音声，特に方言談話の録音資料の保存・利用には問題が山積している。新たな録音資料収集も重要だが，従来多量に集積されてきた資料の扱いを改めて考えねばならない。特に研究者の個人的録音による資料は没後の行方が心配である。8ミリフィルム等映像資料は商品として扱われ生き残ることもあるらしいが，録音テープは絶望的である。例えば井之口有一『京都語位相の研究』の資料目録に著者の個人的録音による資料がかなり掲載されるが，それらはすべて現存しない。

4.4 イントネーション等

文法論寄りのイント研究に，森山卓郎「命令表現とそのイント——京都市方言を中心に——」(『音声文法』) があった。服部匡「終助詞ネの音調に関する森山説への疑問」(『国語学』199,1999.12) は，イント研究には音調の詳細な観察が必須であることを指摘する。松本恵美子「上昇調イントの拡張可能性と多義性」(『文法と音声II』くろしお出版，1999.6) は当該イントの日英対照。李範錫「無型ア方言話者における文イントの標準語化——仙台市方言を例として——」(『国語学』197,1999.6)・同「無型ア方言におけるフォーカスと韻律的特徴との関係について」(『国語学研究』38,1999.3) は，仙台方言の「文イント」やフォーカスの共通語化を報告する。方言本来の文イントは無かったのか。

さらに『文法と音声II』(くろしお出版，1999.6) にはイントの研究がいくつか掲載されている：音声翻訳の立場から韻律の機能と韻律記号付与法 ToBI について述べるニック・キャンベル「韻律解釈における基本解釈」や，広瀬友紀「曖昧な節境界決定における潜在的な韻律の役割」，片桐恭弘他「対話における繰り返し応答の韻律と機能」等。

4.5 分節音

分節音のみを扱った論文は少ない。ローレンス・ウエイン「ハ行音の前の促音」(『国語学』199,1999.12) は，/Qh/が外来語以外にも或る環境で現れることを報告し，その解釈を述べる。著者には琉球の母音を扱った「竹富島方言の a/ə」(『琉球の方言』23,1999.3) もある。琉球の母音について大野眞男「日本語音韻史における宮古方言」(『日本語学』17-6,

1998.5）もあった。

清水克正「日英語における閉鎖子音の有声性・無声性の音声的特徴」（『音声研究』3-2，1999.8）は，当該音声的特徴を日英語のみならず広く諸言語について概観する。そこでも扱われる有声・無声とピッチとの関係について，鄭恩禎他「ピッチパタンが日本語の有声・無声の弁別に与える影響」（同2-2,1998.8）があった。前田広幸「一字漢語サ変動詞のア」（『文法と音声II』くろしお出版，1999.6）も，大阪方言の当該アと語頭子音の無声・有声が関係することを報告して興味深い。近藤ゆう子「日本語と英語の調音結合」（同3-2,1999.8）は，両言語における調音結合を対照し，ア・母音数・母音の長さ等との関係を述べる。

4.6　日本語教育

最近の日本語教育界では中間言語（目標言語とも母語とも異なるが，それ自体言語としての規則的体系を持つ，学習者の言語）の研究が盛んである。そんな中『音声研究』3-3（1999.12）が中間言語の音声を特集する。鮎澤孝子「中間言語研究」がこの分野の研究の概観を行っており便利である。同号には他に助川泰彦・松崎寛・王伸子・鹿島央各著者の論文を掲載する。この他にも日本語教育に関係する音声の研究は非常に多く，本稿の他の節で扱った研究にも教育との関係に触れるものが目立つ。日本語教育界の隆盛が，音声・音韻研究の，特定分野の進展に繋がるのは喜ばしい。ただ，残念ながらこの分野を本格的に扱うのは紙幅の都合上不可能で，以前の本誌展望の指摘の如く『日本語教育』誌等が本格的な学界展望を定期的に出すことが望まれる。

4.7　その他

国語学史に関連して，著者と有坂の音韻観の，共通点と相違点を指摘した金田一春彦「有坂音韻論私観」（『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院，1998.2）があった。

音声と歌謡の関係について，坂井康子「日本のうたにおける促音の音響的特徴」（『音声研究』2-1,1998.4），窪薗晴夫「歌謡におけるモーラと音節」（『文法と音声II』くろしお出版，1999.6）等があった。また，言語障害に関連して，氏平明「吃音者と健常者の発話の非流暢性」（『音声研究』3-1,1999.4）があった。

以上，私の非力のせいで極めて不十分な展望となったこと，何卒お許し頂きたい。本稿で取り上げた研究の中には「方言」「言語生活」等と重複する可能性があるものが一部含まれる。各分野の執筆者の専門領域にもよるが，今後担当範囲の調整が必要かもしれない。

——神戸市外国語大学外国語学部助教授——